

胃部X線撮影

胃部X線について

内臓はX線で映らないので、映るようにバリウム溶液をコップに半分ほど飲み、食道から胃や十二指腸の内面を被っている粘膜面を浮かび上がらせて、異常の有無を調べます。

胃がんの早期発見が最大の目的ですが、潰瘍（粘膜面の掘れ込み）やポリープ（粘膜のいぼ状の盛り上がり）などもよく見つかかり、まれには食道がんが映ることもあります。

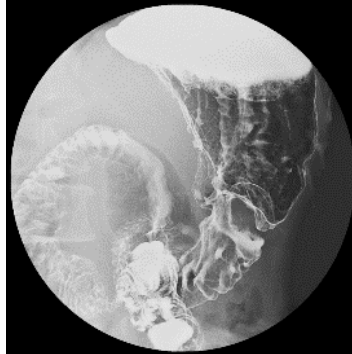
胃や十二指腸のほかに、X線に映る胆石や腎結石が見つかることもあります。

なおこの検査で浴びるX線の量は、問題になるほどではありませんが、妊娠または妊娠の可能性のあるかたはおなかの中の胎児への影響を考慮すると、受診していただくことはできません。

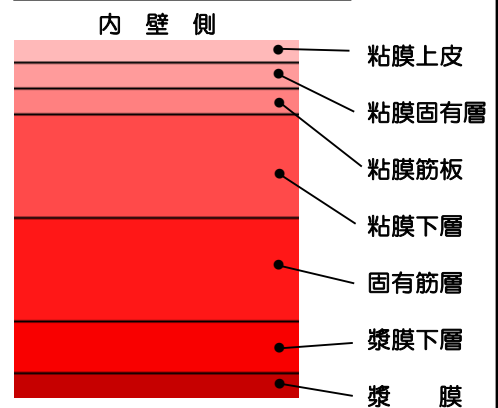
胃部X線検査の様子



胃がん画像の一例



胃壁の構造



胃がん

胃がんは他の多くのがんと同様、早期の間は自覚症状がほとんどないので、「がん年齢」といわれる40歳以上の方、特に50歳以上の方は胃部X線検査を受けておくことが非常に大切です。

男性ではおよそ9人にひとり、女性ではおよそ18人にひとりが一生のうちに“胃がん”になるといわれています。胃がんはかつて日本人のがんによる死亡数の第1位でしたが、最近は診断方法と治療方法が向上し、男性では肺がんに続き第2位、女性は第3位となっています*。

胃がんの死亡率は高いですが、最近は幸い減少する傾向にあります。その理由は、食事が洋風化してきた中、塩辛い食べ物や熱い食べ物を食べるのが以前より少なくなり、さらに検診によって早期がんが発見される機会が増えたことだといわれています。

胃壁は内側から外側にかけて粘膜上皮から漿膜までの数層が重なってできています（右上「胃壁の構造」を参照）。がんは内側の粘膜上皮から発生します。がんが粘膜上皮から粘膜下層までにとどまっていれば「早期胃がん」の状態、この時期に手術でがんを取り除くと、ほぼ（95%以上）治るといわれています。

しかし、がんが筋層から外側に広がると、「進行胃がん」の状態となり、治癒率は65%以下に下がります。

*出典：厚生労働省「平成26年人口動態統計」

<http://www.mhlw.go.jp/toukei/saikin/hw/jinkou/geppo/nengai14/index.html>